

棚田学会通信

第45号 目次

特集 棚田と生きもの (I)	1
棚田学会賞受賞講演	6
お便り	7
日本の棚田百選紹介	7



特集 棚田と生きもの (I)



棚田は人間が農業生産を行うための空間ではない。そこには多くの生きもの(生物)が棲息し、なかには絶滅が心配されるような希少な種も少なくない。そして彼らは人間よりも環境に敏感で、なおかつその変化の影響を強く受けやすく、生きもの同士の微妙な生態系のバランスの上に生きている。今年の棚田学会通信は、「生きもの」という視点から棚田の価値を改めて考えてみたい。まず初回は、生きものにとって棚田がいかに大切かを考えた上で、その棚田における生きものの保全と再生に関わる、地域の地道な活動を紹介する。

モリアオガエルの産卵(上)とヤマアカガエルのオタマジャクシ(下)

(写真提供: 小山 舜二氏)

棚田と生きもの

宇都宮大学名誉教授 水谷 正一

1. 生きものを調べ、保全する活動の広がり

いま、全国の農村で生きものを調べ保全するための活動が、少しずつではあるが広がりをみせている。対象となる生きものはホタル、カエル、魚、鳥、貝、昆虫などの動物、水草や畦畔雑草などの植物と多様だ。これらの取り組みでは、次のような特徴がうかがえる。

第一は、このまま放っておくと身近にいた生きものがいなくなるという、強い危機感があることだ。たとえば、田んぼでたわむれていたメダカがいつの間にかいなくなった。近所の小川からも姿を消した。いったいどこにいったのだろう。そんなことがキッカケで調べてみたら、メダカが見つかったのは小さな池だけだった…。これに似た話が、全国の津々浦々で行われている田んぼの生きもの調査から聞こえてくる。それだけ生きものが減ってきたということだろう。

第二は、活動に参加する人の層がきわめて幅広いということだ。農家、学校の先生と生徒、親子、公務員や民間企業の職員、定年退職者など参加者の肩書きや身分はさまざまであり、いいかえれば、それぞれの地元で普通に生活している人々が取り組んでいるのが、生きものに関する活動である。しかし、ふつうの人が参加しているといっても学習意欲が高いので、研修会や講習会などは盛況だ。各地に在住する生きもの専門家、こうした活動のアドバイザーとして引っ張りだこだ。

第三は、「良い環境があるから良い作物が育つ」という言い方に象徴されるように、生きものが有機農業あるいは減農薬・減化学肥料農業とむすびついて、“安全で安心な農産物の証し”となってきたこ



棚田の水路で調査

とだ。例えば2006年12月に成立した「有機農業の推進に関する法律」では、有機農業が農業の自然循環機能（農業生産活動が自然界における生物を介在する物質の循環に依存し、かつこれを推進する機能）を大きく増進し、かつ農業生産に由来する環境への負荷を低減するものである（第3条）と捉える。すなわち、生きものの命の循環に依存するのが有機農業であり、そうした農業の取り組みに熱い視線が向けられるようになった。

第四は、生きものに向けたまなざしが人と生きものとの関係を考えるキッカケとなり、命のつながりを支える環境、環境に影響をおよぼす農業や暮らしのあり方、さらに人と人の関係を問い直すような深い精神性がうかがわれることだ。また、そうした活動が人と生きものとの関わりを再生するばかりではなく、人と人の中で失われた関わりを取り戻す“人間回復”のプロセスにもなっている。

かつて野生の生きものは、一部の専門家や愛好家に関わるマニアックな世界だった。しかし近年、身近な生きものを切り口にしながら、地域環境や食の安全性を考える新しいタイプの地域活動、たとえば「田んぼの学校」が生まれている。「棚田オーナー活動」でしばしば取り組まれている生きもの調査もそのひとつだ。こうした活動の特徴とそれが地域の活性化に果たしている役割について、再認識するときを迎えたといえよう。

2. 生きものと農業

農村環境は人の自然に対する持続的な働きかけを通じて形成された、循環を基調とする二次的自然である。したがって、農村の生きものは農業と密接な関係にあり、人間によって改変され、管理された二次的自然の一部（構成要素）をなしている。そうした農村の生きものと農業の関係に関する、代表的な二つの見解を紹介する。

宇根豊の見解：農業における生物多様性

虫見板を道具として減農薬運動を実践してきた宇根豊は、田畑における生物多様性とそこにおける“ただの虫”がもつ意味を次のように語っている（宇根、2007）。「ただの虫は当初、害虫ではないという識別によって百姓に大いに安心をもたらし、天敵ではないという認識で少しの失望をもたらした。そのままであれば市民権を得ることもなかっただろう。ただの虫という概念が徐々に力をつけていったのは、自然を代表する生きものであることが気づかれ、じつは農業生産を土台で支えているかもしれない、というまなざしの深化がはかられたからである。（中略）メダカやホタルがいない川よりいる川のほうが、蛙やトンボがいない野辺よりいっぱいいる野辺のほうが、自然に恵まれている、自然が豊かだと感じる感性がよみがえってきたのである。（中

略) 虫見板の使用がなければ、いまだに田んぼの中の生きものの多様性は発見されることなく、眠りつづけていたかもしれない。私たちはこうした生きものに『農業生物』という名前をつけて、この発見を広げていこうとしている」。

そこで、宇根たちが福岡県版環境支払いとして、2005年度から2007年度にかけて取り組んできたのが「農のめぐみ」調査だ(福岡県、2008)。この調査結果から、農家が実際に調査した田んぼの生きものについて、それが多いのか少ないかを判断する尺度、すなわち生きものの生息密度を「豊かな水準(1950年代)」と「危機ライン」として指標化し、提案した(宇根、2007)。

宇根においては、田んぼや畑の生物多様性とは、益虫(天敵)と害虫という範疇に限られない、虫見板で捕えられた圧倒的多数のただの虫だった。ここから発想の転換が生まれる。すなわち、益虫も害虫もただの虫によって生かされていること、害虫の大量発生はただの虫によって抑制されていること、大量発生しない害虫はただの虫と何ら変わらないこと、したがって、ただの虫は農業生産には不可欠であり、農業の土台を支えているのではないかという仮説だ。ここから、次のような関係が生まれる。

- 農のめぐみとは、食べもの、生きもの(農業生物)のこと
- 食べもの尺度は経済価値、生きもの尺度は多様性と生息密度
- 環境支払いは、生きもの(環境)を維持する仕事にたいする対価

鷺谷いづみの見解：人と生きものにやさしい水田農業

水田再生のために、保全生態学者の鷺谷は次のような考え方を取り入れる必要があると主張する(鷺谷、2006)。「絶滅危惧種を含めて、水田とそのまわりの環境を特徴づけてきた在来の生物に注目する。それらの在来種が生息・生育できる条件を満たす水田整備、農法を用いる。その中から消費者にメッセージを伝えるに適したシンボルを選ぶ。取り組みが成功しているかどうかを、指標としてふさわしい種(できればシンボルを含めて数種以上)のモニタリングによって確かめながら順応的に取り組みを進める。(中略)化学農薬や化学肥料の過剰な投入を回避すると同時に排水の水質に責任を持つ。最小限の投入、もしくは無投入で可能な農法を開発する。その農法において、水田の生物ネットワーク(食物網：筆者注)を活かす方法を工夫する」。

また、「なぜ生物多様性を守るのか」という問いに対して鷺谷は「自然の恵みともいべき自然の生態系が提供するさまざまな財やサービスを生み出す

のは、生物多様性、すなわち多様な生物の連係プレー」であるとして、生態系サービスのタイプと具体例(ミレニアム生態系評価)を示した。

鷺谷にあっては、「日本の多くの水田は、地域の生態系からも伝統的な文化からも断絶させられ、化学肥料と化学農薬を多量に投入して『規格』に合う米を生産する『青空工場』化している」ことから、「生産者と消費者の絆を生き物たちが取り持つお米づくりのための水田再生は、確かに持続的なブランド化の試みでもある」とした。こうした鷺谷の考え方を要約すると次のようになる。

- 現代の水田は、農薬・化学肥料の多量投入、コンクリート化により不健全な生態系をつくっている
- 水田再生とは、在来種の生育・生息が可能な水田整備と農法に転換すること
- 生き物ブランドは、安全・安心、高水準の環境配慮を証明するもの

3. 棚田と生きもの

以上で述べたことは、すべて棚田にも当てはまる。否、棚田は平場の田んぼにくらべて、次のような理由から生きものとの“共存性”がより強く保たれていると思われる。

第一は、棚田の立地上の特性だ。棚田では小空間のなかに田んぼ、畑、茅場、水域、林野等の多様な土地カバーが展開する。さらに水域だけをとっても溜池のような恒久的で止水の水域、用排水路等の恒久的で流水のある水域、田んぼのような季節的で止水の水域、テビのような恒久的だが止水ないしは流水の水域等がある。ここでテビとは栃木県の地方名で、「上段の水田や隣接する丘陵からしみだす夏は冷温、冬は高温の水を受けとめるために、法尻に掘られた小溝」のことだ。もともとは稲の冷温障害を防ぐために造られたもので、これをぬるめ、ひよせ、江、てあぜ、ほりあげ等とよぶ地方もある。棚田では、こうした多様な水域や土地カバーがモザイク状に存在することで多様な生きものの生息・生育環境が生まれる。

第二は、棚田の農作業上の特性だ。棚田の稲作を例にとれば、それは“生身の作業が欠かせない農業”といえよう。生身の作業とは畔の築き立て、畔塗り、法面の除草や補修、水路の維持管理、苗の補植、水口・水尻管理、肥料散布、角地の稲刈りなどの手作業のことであり、機械化できない等身大の作業のことだ。こうした作業の合間のくつろぎでは、美しい自然や風景を愛で、生きものに接することで至福の時間を味あうことになろう。棚田農業は、その営みにおいて二次的自然と一体化する実感を得られる場でもある。

しかし近代化のなかで、こうした共存性は棚田農

業の衰退を招く原因ともなった。すなわち、棚田の小規模性が農作業を効率する妨げとなり、農作業のしんどさが耕作放棄地の増加を促した。そして棚田の減少が生きものの稀少化に拍車をかけている。平成12(2000)年度に始まった中山間地域等直接支払制度には、こうした動きに歯止めをかけることが期待された。平成22(2010)年現在、棚田をふくむ中山間地域はわが国の耕地面積の40%、農家数の44%をしめ、食糧生産や国土保全において重要な役割をはたしている。しかし、中山間地域の耕作放棄地は21.5万haとなり(農林水産省、2014)、農業従事者の高齢化とあいまって深刻な状況におかれている。

棚田とそれをささえる棚田社会が存続すること、それが棚田の生きものを保全する大前提である。棚田学会には、中山間地域等直接支払制度の充実を図るとともに、近隣都市住民や消費者との連携をつよめ、棚田農業の維持存続に貢献することが求められている。

引用文献

宇根豊(2007):天地有情の農学、コモンズ、161-162、177-188.

農林水産省(2014):中山間地域等直接支払制度の最終評価(参考資料)、3、6.

福岡県・NPO法人農と自然の研究所・NPO法人環境創造舎・NPO法人北九州ビオトープ・ネットワーク研究会・環境稲作研究会(2008):ふくおか農のめぐみ100—田んぼの生きもの目録作成ガイド—、福岡県農山漁村振興課・NPO法人農と自然の研究所、134.

鷲谷いづみ(2006):地域と環境が蘇る水田再生、家の光協会、64-65、21-22、3-4.

生きものと共生した体に優しい 米づくりを目指して

鞍掛山麓千枚田保存会会長 小山 舜二

四谷の千枚田は鞍掛山(883m)に降った雨が地中深く浸透し、湧水となり棚田全部を潤している。かつては、1,296枚が耕されていた田んぼも減反政策(生産調整)が起因、休耕、転作が余儀なくされた。それに追い打ちを掛けるように経済成長期に突入、棚田の百姓は効率の悪い段々田んぼに見切りを付け、労働力の供給者として現金収入を求め、都市近郊へと流出、平成元年には373枚にまで減少した。これに危惧した筆者は平成3年から「地域の宝」として棚田の保全、継承活動を開始、平成8年には420枚まで復田した。

総面積3.6ヘクタール、1戸当たりの耕作面積

12アール(平均15枚)と規模も小さく生産性は極端に低い。四谷の千枚田は「湧き水、天日干し、これ以上贅沢な米はない」、また、「真正面から見る姿は他に比類なし」と定評があり自然観察の場として人気を博している。平成13年から親子観察会を積極的に実施し、その結果、以前、棚田に普通に見られた生きものの生息数がかなり減少していることに気づき、農薬や化学肥料に依存してきたことが大きな要因であることを実感した。そこで翌年(平成14年)生きものの自然再生を視野にビオトープを設置した。中でも希少種であるモリアオガエルやヤマアカガエルなど、今まで見られなかった種の繁殖場とするための保全・再生活動に取り組んだ。モリアオガエルは300m範囲内(遺伝子レベル)の自然分布域でカラスにいたずらされ、壊れた卵塊を家に持ち帰り、水槽飼育、カエルに変態間近のオタマジャクシを親子観察会においてビオトープ内に放すと同時に田んぼの一角にナンテンを植えたところ、棚田の百姓から「なぜ、田んぼにナンテンを」と奇異の目でみられた。その後、毎年壊れた卵塊やオタマジャクシを移殖した結果、4年後の平成18年6月にはビオトープ内で2個体の産卵を確認。(この年、3個体の産卵確認)その後は毎年産卵数も増え、分布も順調な拡大がみられた。なお、平成21年6月30日には念願のナンテンにも産卵。苦節7年、「手心を加えれば、結果は生まれる」の瞬間を味わい、小躍りした。モリアオガエルがナンテンに産卵したことは棚田の百姓や都市近郊から訪れる人々に大きな理解を得ることができた。

ヤマアカガエルも春(2月)の最初の雨の朝には必ず産卵。その後、雨の朝には必ず産卵するが、概ね4回目の産卵個体は最初に生まれたオタマジャクシの餌となり、ほぼ1日で食べられてしまう。また、あまり密度が高いとカエルに変態しないことも判り、自然の摂理が如実に表れることも判明した。その後、両者の自然繁殖、個体数の拡大も順調にみられ、420枚の棚田全部をビオトープと位置づけた。モリアオガエル、ヤマアカガエルの自然再生から大きな波及効果が生じ、現在ではタニシ、ドジョウ、ワシ・タカ類なども拡大の傾向にある。平成25年には2つがいのクマタカが飛来、子育てのため、ヤマカガシ、シマヘビなどを餌として持ち去り、極端に減少したことが残念であったが、マムシは残った。

こうした地道な活動を「四谷の千枚田だより」で発信。大きくは生物多様性国際会議(COP10)招致貢献、エクスカージョン会場として取り上げられた。地元企業「横浜ゴム新城工場」は生物多様性調査をテーマに過去3年間千枚田周辺のモニタリング調査を実施、平成25年には千枚田2ヶ所にビオ

トープを設置、多様性に富んだ自然再生に貢献して頂いている。英国放送協会 BBC は多様性に富んだ四谷の千枚田を日本の里地・里山と位置付け、モリアオガエルの生態を主に長期撮影（19日間）を実施した。地元、鳳来寺山自然科学博物館、市内外の小学生、一般からの「生きもの教室」自然観察会などを依頼されることも多く、単なる観察会ではなく、小さな生きものが稲作を生態系を支えているといった生物多様性を少しでも理解する場として活用している。

自然再生の取り組みから、その効果を考察すると、カエル類はウンカ等、害虫を喰食することで殺虫剤など減農薬に繋がり、タニシやドジョウは酸素補給やバクテリアの活性を促すなどの効果が生じる。厳しい作業条件を課せられている棚田の百姓は「いっこくで頑固」だが、一つのビオトープから始まった生きものの賑わいを見て、減農薬や化学肥料から干草などの有機肥料に転換、「生きものと共生した体に優しい米づくり」を目指している。

坂折棚田でのビオトープ活動

岐阜県立国際園芸アカデミー 准教授 相田 明

岐阜県恵那市中野方町にある「日本の棚田百選」に認定されている坂折棚田の保全活動に関わるようになってから10年が経つ。岐阜県立国際園芸アカデミーの演習として、2004年5月から学生とともに田植え、草取り、稲刈りの体験を通じた環境教育・調査やランドスケープ・ウォッチングを開始（現在はカリキュラム変更のため半日の田植え、ランドスケープ・ウォッチングのみ）、その延長として、2007年4月からはヤマアカガエルを目標種とした棚田ビオトープ活動も始まった。ヤマアカガエルは早春に産卵するため、普段生活している山林から棚田に来る、「山」にいる「赤い蛙」である。山林と止水面がセットとなった環境でしか生きることのできないこのヤマアカガエルは、棚田らしいカエルといえる。

中野方川を経て木曾川に注ぐ坂折川に沿った3枚のビオトープ（面積386㎡、水張り面積の合計128.1㎡）は、十数年前に棚田から畑地へ、2004年から休耕地となった場所である。この棚田ビオトープの設計思想は、三様の環境をつくること。最も小さい上段のビオトープ（水張り面積16.9㎡）は、伝統的な無農薬・有機栽培による「昔ながらの棚田」である。大きな岩のある中段のビオトープ（同：72.7㎡）は、人と生き物がふれあうビオ

トープとして「ふれあいの棚田」と名付け、生物の観察がしやすいように間伐材で畦から水田の真ん中にある岩まで橋が架かっている。真ん中にある岩を中心に稲をドーナツ状に植えているのは、イギリスの田園地域管理制度において、生態系保全のために農地の「縁」部分を休耕する（managing arable field margins）手法を模している。下段（同：38.5㎡）は生き物のためのビオトープとして稲を植えない「休耕田のビオトープ」としている。また、法面の一部の刈り残しゾーンは帰化植物のみを抜き取りする管理としている。

これらビオトープ活動の特徴として、恵那市坂折棚田保存会、棚田ネットワーク、岐阜県立国際園芸アカデミーの協働により管理・運営がなされていることである。ビオトープ管理、広報宣伝活動、知識の提供とそれぞれに役割がある。

棚田ビオトープといった狭いエリアだけでなく、坂折棚田全域を対象としたヤマアカガエルの卵塊調査「かえるの卵を探そう！」を2008年3月から企画している。市民参加型の生態調査で、地図上の棚田1枚1枚にヤマアカガエルの卵塊がいくつあるか記録するものである。また、「小学生棚田ビオトープ観察会」を2008年8月に開催、続いて、2009年8月に「日本陸水学会東海支部のサマースクール」に参加した小学生、幼児の観察会を開催した。そして2011年8月から現在まで「夏休み・こどもビオトープ観察会」を地元の中野方公民館の一環として開催している。

これら活動を支えているのは、地域の団体である恵那市坂折棚田保存会のメンバーである。日々の水管理はもちろんのこと、フィールドの提供、また、棚田ビオトープでヤマアカガエルが卵を産んだ時には携帯電話のメールで「山赤蛙今朝初産卵しました」と連絡をして頂ける。このような環境があるからこれまで活動を続けることが出来たのだと思う。



子どもビオトープ観察会

朱鷺の餌場づくりを軸に据えた 棚田保全の戦略

NPO 法人トキの島事務局長 中島 明夫

1981年1月に佐渡の野生下にいたトキが全鳥捕獲される以前は、佐渡の棚田地域がトキの生息地であった。中国から贈られたトキの人工繁殖の成功により、トキ野生復帰を念頭に置いた環境庁の「共生と循環の地域づくりモデル事業」が2000年より始まり、かつての生息地を意識して山奥の放棄棚田の復元が展開されていった。

最初に取り組みを始めたのは地域住民自らが地域資源を見つめる作業。地元学手法と簡単なワークシートを活用した生き物しらべを実施した。

放棄田を復元する作業では、棚田ネットワーク、樹恩ネットワークが10年以上ボランティアを募って佐渡の棚田での活動プログラムを実施中。獨協大学経済地理学研究室では地域調査実践と環境整備ボランティアのセットのゼミ合宿を7年間実施。新潟テレビ21(テレビ朝日系列・新潟ローカル)ときプロジェクトではテレビ局がスポンサー企業とボランティアを募り、佐渡の活動団体へ送り込んできた。新潟大学トキプロジェクトは研究実習地として放棄棚田を復元している。

これら交流による放棄棚田の復元が展開されていったのには、中山間地直接支払制度2期目の一律減額の対処のひとつとして、交流・協働による多面的機能の創出が求められていたことが大きい。加えて、NPO法人の乱立の時期と重なり、民間助成金の活用、自然再生事業の受託などと、それぞれのトキ野生復帰の夢の実現の思いが上手く結びついた。

これら地域住民、NPOの取り組みが展開される中、新潟県ではトキ生息環境整備活動団体への助成金事業を展開している。佐渡市ではNPOや大学・ボランティアの活動拠点としてトキ交流会館を設置し、道具の貸出、ボランティアバスの提供、研究助成、ビオトープ整備の助成金、朱鷺と暮らす認証制度の創設で市民やNPOの活動を支援している。そして2008年9月にトキ野生放鳥が実現し、これまでに11回177羽が野生放鳥され、野生下生まれを含めて現在139羽(2014年12月末現在)が生息していることになっている。

トキとの共生を活かすため、生物多様性佐渡戦略が作成され、世界農業遺産(GIAHS)登録が実現した。佐渡の棚田はその象徴として描かれている。これまでに、佐渡の棚田とトキをセットにしたブランド米は新潟県総合生活共同組合、パルシステム生活共同組合が扱ってきた。佐渡棚田協議会も設立され、トキとの共生、自然再生、生物多様性、地域再生、

GIAHSの取り組みが展開する中で、人・金・情報などがうまくまわって、環境保全や地域活性化を目指している。課題も多いが、これまでの築いてきた実績の上に、日本型直接支払制度を活用した交流で棚田保全を目指したい。



佐渡での棚田保全活動

棚田学会賞受賞講演

放送番組

「NHK スペシャル天空の棚田に生きる
～秘境・雲南～」の制作と放送

株式会社えふぶんの壱 安原 歩

栄えある棚田学会賞を頂き光栄です。一生の内にぜひ見て見たい風景—それが中国・雲南省の「紅河ハニ棚田」でした。初めて写真集でその存在と美しさを知り、鳥肌が立ったのを覚えています。標高差500m、1500段、東京ドーム1万倍もの想像を絶する巨大な“天空の棚田”。一体誰が、何のために造ったのか？企画を温め続けて8年後、ようやく番組制作が実現、現地に立つことができました。まず驚かされたのが、険しい山岳地帯の中で山林、雨、霧、家畜を巧みに利用し、水と栄養素を水田に送り続ける循環型生産システムでした。このスケールの大きい構造を、どう映像表現するか？複雑に入り組んだ渓谷でのヘリコプターからの撮影は不可能。そこで自在に飛行できるエンジン付きのハングライダーによる世界で初めての棚田の空撮に挑むことにしました。しかし深い霧と強風の日が続き、2ヶ月の取材期間中、飛行できたのはわずか2回だけ。こうして誰も見たことのない棚田の全体像を捉えることができました。夏の青々とした棚田の清々しさ。秋、一面黄金色の世界で稲を刈る人々。そして全ての畦を削り、泥を塗り直す作業。やがて水が



天空の棚田（中国・雲南）

張られ、空の色を映し込み輝く無数の水田。季節が移るごとに、新たな美しさを見せてくれる棚田の姿は感動的で、私たち取材スタッフは無我夢中でカメラを回し続けました。こうして撮影テープが40本あまり、30時間分もの撮影が完了しました。

1200年間、棚田と共に生きたハニ族の気の遠くなるような激しい労働。「米をつくるために働き、その米を食べ、また働く」—秘境の地で純粹に生き抜くためだけに繰り返されてきた棚田の民の営み。そこには、現代人が失った“人が生きる原点”があると感じました。今回は残念ながら、春の田植えの取材はできませんでした。その撮影のために再び現地を訪れて、棚田の魅力をまた探してみたい。そう夢見る昨今です。

中山間地の農業と暮らしに関する研究活動

高校生校内模擬カンパニー「アグリ☆スマイル」相談役
（和歌山県立有田中央高校教諭）上岡 照明



有田中央高校アグリ☆スマイル

荣誉ある賞をいただき誠に有り難うございました。現在、生徒たちは中山間地での農林業の多面的機能に付加価値が付けられないか、また地域特産品

を使用したオリジナルスパイスのモデルプランの作成を中心に研究を展開しています。

中山間地の農林業が活性化し豊かな生活ができる基盤を作ることが耕作放棄地の解消、過疎化の防止につながり、減災につながると考えます。都市と農村が共存していくためには生産者、消費者の意識改革が必要だと考えます。まさしく棚田は減災の中心的役割を果たすのです。そのために若い高校生が棚田での活動をおし地域のくらしの現状、農林業の環境への多面的機能を学ぶこと、また研究発表することが啓発に繋がると考えます。

生徒たちの研究はキャリア教育の中心的役割をたし、学校外の様々な大人に関わって頂くことで社会性、主体性が身に付くと考えます。

これからも棚田学会賞の受賞に恥じないように次世代を担う子供たちとともに地域に学び、その学びを地域に還元できればと考えます。

お便り

佐々木 卓也

公益財団法人ひろしま文化振興財団より、小生の永年の活動に対し「地域文化部門」を代表して、平成26年度「第35回広島文化賞」が授与されました。広島県民文化センターでの贈呈式（11/26）には、我が家内も同席し栄えある受賞を賜りました。「石垣を讃える会」での地域活動も好評され、「中国地方石垣百選認定事業」「石垣探訪ツアー」や「棚田学会」としての講演活動や現地探訪なども、選考委員から注目されました。本会のご協力ご支援に対し、衷心より御礼申し上げる次第です。（会員・理事）

日本の棚田百選紹介

長崎県南島原市『谷水棚田』

南島原市企画振興部商工観光課 田中 徹

「谷水棚田」がある南島原市は、長崎県の南部、島原半島の南東部に位置し、北に雲仙普賢岳がそびえ、南東部には、有明海をはさんで熊本県天草地域に面しています。

日本最初の国立公園である雲仙天草国立公園は昨年80周年を迎え、雄大な山々と美しい海を併せもっ



谷水棚田の初夏（有明海・天草地域を望む）

た風光明媚な地域です。平成 21 年 8 月には、島原半島ジオパークが日本第 1 号として世界ジオパークに認定されるなど、自然環境に恵まれた地域です。また、「島原・天草一揆」の舞台としても有名であり、南蛮文化がもたらしたキリシタン関連遺産が数多く残っている地域でもあります。中でも世界文化遺産の候補である「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産となっている「原城跡」「日野江城跡」は、他地域に類のない歴史的遺産であります。

さて、「谷水棚田」は、南島原市の中心からやや南にある南有馬町の北西部に位置する白木野谷水地区にあります。この地区は、平成 8 年度「第 5 回美しい日本のむら景観コンテスト」において農林水産大臣賞を受賞し、平成 11 年日本の棚田百選に認定されました。耕作面積約 4.5ha、棚田枚数約 230 枚を有しており、水稲の裏作として馬鈴薯栽培が盛んです。水源は上流の大池（溜池）で、南有馬町は、水源に乏しく、農業用水の大半を大小 660 余りの溜池に依存しています。

ここ「谷水棚田」の魅力は棚田から見渡せる景色がとても美しく、日本一の干満の差を誇る有明海から天草地域を見渡すことができます。また、水張り、田植え、水稲の成長期、黄金色に輝いた秋の収穫期、冬の雪景色や馬鈴薯の時期など四季折々の風景を楽しむことができます。そのため、多くのカメラ愛好家が足繁くこの地を訪れています。素晴らしい風景が人を育むとも言われますが、長崎の平和祈念像や国会議事堂内にある板垣退助像など、数多くの作品を制作した日本彫刻界の巨匠 北村西望翁はこの地の出身者です。現在、西望翁の生家は「西望公園・記念館」になっており、多くの観光客を受け入れています。

また、南島原市の素晴らしい自然環境や長い歴史の中で人々の生活によって営まれてきた古式ゆかしい風習や伝統文化が今も大切に受け継がれており、殿様の参勤交代のお国入りや巡察時に行列の先頭で踊ったと伝えられている「先踊り」は、この地に 300 年前から伝わる伝統芸能です。

本市の基幹産業は農業ですが、地域の特色を活かした観光振興策として体験型観光を推進していま

す。南島原市の棚田でも各種体験を実施しており、ここ白木野地区でも小学生による「田んぼの学校と生き物調査」を行い、田んぼを遊びと学びの場として活用し、環境に対する豊かな感性と見識を持つ人を育てることを目的としています。

本市の体験型観光では、特に農林漁業体験民泊事業に力を入れており、この事業では訪れた人にその土地らしい心のこもったおもてなしを提供するなど、多くの皆さんと交流を図っています。平成 21 年度 6 軒の受入家庭からスタートした事業も、今では約 150 軒まで増加し、関西や関東の中学・高校を中心に、年間約 10,000 人の修学旅行生を受け入れています。更に、海外からの受け入れも行っており、台湾からは毎月定期的に受け入れています。この民泊事業でも、棚田の存在は大きく、素晴らしい景観に誰もが驚くとともに、農業の大切さや大変さを学んでいます。

このように、谷水棚田は米や馬鈴薯の生産だけでなく住民の生活と密接な関係にあり、地域のシンボルとなっています。ただ、棚田の維持管理にはかなりの労力を伴うことから、農業者の高齢化や人口減少により今後、保全していく人材の確保などが課題に挙げられますが、この素晴らしい景観を守り伝えていくため、市民力と都市部との交流によって、活動を更に活発に行っていきたいと考えています。



民泊での馬鈴薯の植え付け体験

【編集後記】

棚田は、それ自体が媒介となって、多様な生きものを甦らせる力を持っている。そしてそのことによって人間と生きものを新たな形で結びつける。今回の特集を通じて、棚田という「器」の奥深さを改めて感じざるを得ない。（高木徳郎）

棚田学会通信 第 45 号 2015 年 2 月 28 日発行
発行 / 棚田学会

〒 169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育・総合科学学術院 高木徳郎研究室内

TEL: 03-5286-1572 FAX: 042-385-1180

E-mail: tanadagattukai@yahoo.co.jp